

平成十二年十二月九日 和敬塾予餞会記念講演

「いまこそ元気で誇りある日本へ」

台湾総統府国策顧問 金美齡先生

皆さん、ご卒業、おめでとうございます。

実は私は学生時代から和敬塾の存在を知っておりまして。選ばれたものが入る塾だと聞かされておりました(笑)。もしそれが本当だとしたら、今日は私の話を最後まで私語をせずに聞いてください。

私は早稲田大学の授業で、二十数年間、私語は一切許しませんでした。また、すべての講演会で、私は私語を許しません。一つの理由は、聞きたい人がちゃんと聞けるという環境を保つためです。二つめの理由は、演壇の下で参加者が私語をしていると、私は気分がそがれます。気分がそがれるということは、私自身が集中し、緊張して、話ができないということなのです。それでは真剣に聞いている人に申し訳ないと思うからなのです。

授業も一年間同じように行ないました。そして、最終的に、学生たちからは、この一年間、こういう緊張した授業が受けられて初めて本当に大学らしい授業を受けた、という感想が返

ってきました。

もちろん、こういった考えに反対がないわけではございません。しかし、毎回、授業の終わりに、「ハア」という緊張感から解放される吐息が聞かれるぐらいに、八〇分間の緊張感に満ちた授業を、早稲田でやってまいりました結果として、今の私があるのです。

つまり、私は教師として人に真剣に語ります。もちろん私は毎日授業を持っていたわけではありません。でも、毎回の授業が私にとっては真剣勝負と同じでした。それだけの心構えがあるからこそ、学生もただただ単位を落とすという心配だけではなくて、一年間静かに、そしてときには手を挙げて真剣に討論をするという授業が持てたわけです。このことは基本であり、秩序です。この基本と秩序をわきまなければ、何ごとも成しはできません。

もちろん、私は堅いだけの人間ではありません。私は生活をととても大切にしています。今も控え室にいて、窓の外から若者たちがこちらを

眺めていたら、私は手を振ることも知っていません。それから、皆さんが私を歓迎する反応に対して、私もとてもうれしく反応します。何となくタレントになった気分にもなります。

そういうことと、それから話をするときには皆さんに静粛を要求するのは、全く衝突しません。人間というのは、ときには真剣に、ときには集中して、また、ときにはリラククスし、ときにはドンチャン騒ぎもする。そういうことの切り換えができる人間であること、これがエリートの特徴です。

今日、私が和敬塾に最初に入ってきたときに、「ああ、日の丸が出ている」と車の中で言いました。それは私にとって、とても大切なことなのです。日の丸の旗は、私の旗ではございません。だけど日本人にとっては大切な国旗です。もしその国旗を大切にしないところであれば、私はその人たちに敬意を持って接することができないと思います。なぜならば、今のこの時代において国という存在がどれだけ大

切かということ、私という人間が身にしみて感じているからなのです。

私は国を持たない人間として三十一年間過ごしました。もし私の本を読んだ方がいらつしやるならご承知でしょうけれども、私は三十一年間パスポートなしで日本に滞在しております。

私は、一九五九年に留学生として日本にやってきました。早稲田の第一文学部に入学して、英文科に在籍しておりました。それから五年ほどたつて、私はパスポートが無効になりました。それは、当時の台湾にあった蒋介石政権を批判したからなのです。それから、「台湾」という名称がタブーだったときに、あえて「台湾稲門会」をつくったからなのです。爆弾を投げたわけでも、何か行動を起こしたわけでもなく、言論上の活動に対して、そういう弾圧を受ける時代があつたのです。

私はパスポートが無効になりました。無効になつたパスポートを私はカッコよくポイと破つて捨てました。捨てるのは簡単です。破るのも簡単です。しかし、それから三十一年間、パスポートなしで外国に住むということがどういうことであるのか、もし皆さんのなかで外国に行つてパスポートをなくした経験を持つ人がいたら、よく分かると思います。

しかし、皆さんはたとえパスポートをなくし

ても、現地にある日本大使館に駆け込めば、すぐに何らかの旅券がもらえるわけです。

ところが、私はその大使館からパスポートを無効にされているわけです。そして、すべての大使館にブラックリストが回つており、どこの大使館に行つても、つまり日本だけではなく、例えばアメリカ、イギリスの大使館に行つても、絶対にこの人にはパスポートを出さない、また台湾の、つまり自分の国のビザ、入国許可をおろさないというリストが全ての大使館に配布されていきました。これを実際に見た人がいるのです。

というのは、私のかつてのボーイフレンドが、当時ロンドンで、国交があれば大使にあたるポストに就いていました。共通の友人がロンドンへ彼を訪ねて、そして、そのブラックリストを見せられました。「見てごらん。美齡が載っているよ」。その共通の友人がロンドンから東京を通つて台湾に帰るときに、我が家に立ち寄つた際、「君の名前が載っているブラックリストを見たよ」と私に言いました。だから、これは抽象的な話ではなく、現実的に具体的なブラックリストが存在したのです。

その後の話がまたおかしい。「でも君はブラックリストのなかではB級だったよ」と言うのです。それで私は怒りました。「失礼な、ブラックリストだつてA級でないと困る。B級とは

何ごとよ」。自分で考えてみて、少し働きが足りないのかなと反省しました。もっと頑張つて活動しまして、幸いにも最終的にはA級になつたようです(笑)。具体的に証明できる話ですけど、でも、また話が長くなりますので、ここまでにします。

そういうふうには、私は台湾という国を救いたくて努力をしていました。だから、当時、台湾にあった蒋介石政権を私は否定していたわけです。今では民主化され、自由化されて、ブラックリストが破棄され、それで私はもう一度、表書きは中華民国と書いてありますけれども、台湾のパスポートを取り直しました。

今は私はパスポートを持つ人間です。あの三十一年間はパスポートを持たなかつた。しかし、今はパスポートを持っています。けれども、私がつ持っているのは、私が常に考えている「台湾」という国の名前がついたパスポートではありません。現実的には台湾という国名のだけども、名前は「中華民国」という非常に矛盾した状態になつていて、「中華民国」という名前がついているパスポートを持っています。

皆さんは申請すれば間違いなく日本のパスポートを持てるでしょう。しかし、パスポートを持たない人間、中華民国という名のパスポートを持つ人間、日本というパスポートを持つ人間、それぞれに対して、対応はすべて違ふとい

うことは、皆さんは分からないでしょう。

外国旅行をしたことがある人は手を挙げてもらえますか（挙手多数）。はい。かなりいますよね。皆さんはパスポートを持っているわけですが、自分のパスポートがどの国にもきちつと通用し、いかに抜群の効力を持っているかが分からないでしょう。皆さんは違うパスポートを持ったことがないでしょうから、比較のしようがありませんね。

私はパスポートを持ちませんでした。それから、今は中華民国というあまり役に立たないパスポートを持っています。なぜ役に立たないかといえば、中華民国を認めている国は世界じゅうで二十八しかありません。それもゴマ粒のような、私が訪ねようもしない国ばかりです。現に私の子供たちは、私たちと同じ状態で、つまりパスポートを持たない人間として育ちました。日本の法律は、親に準ずるのです。つまり血統主義なのです。親の国籍によって子供の国籍も決まります。欧米の国々の中には、出生地主義と言いますが、親が何人であろうが、その国に生まれた人間はその国の人間としての国籍が無条件におけるといふ制度があるのですけれども、日本は違うのです。

ですから、私たちがパスポートを持っていないければ、子供も当然パスポートを持っていません。私たちが日本人でも何国人でもなくて宙ぶ

りりんであれば、子供たちは宙ぶらりんです。私の息子と娘は、私たちの子供として、パスポートなしの人生を二十五歳頃まで過ごしました。

なぜ二十五歳までか、といいますと、年子なので、上の女の子が卒業して就職し、一年後に下の男の子が卒業して就職して税金を納める身分になってから、私は子供たちに、「あなたたちが何人でありたいかということをも自分で決めなさい。アイデンティティーの問題だから、親に従う必要はない。あなたたちがどの国の人間として生きたいかということも、自分たちの選択で決めなさい」と言いました。あの子たちは日本に生まれて、日本で育ちました。そして躊躇もせずに日本の国籍を申請して、日本人になりました。

私は百パーセントそうなるだろうと思っていました。なぜならば、私たちは子供たちが台湾人として生きることを一切強制しませんでした。彼らが長じて自分で決めるときに、どの国の人でありたいかということを自然に決められるような教育をしました。

あの子たちは小さいときから、日本と台湾がスポーツのゲームで争っているときに、必ず日本を応援していました。私たち夫婦はそばでそれを見ていて、それが自然だと思えました。だから、あの子たちが日本人として生きるという

ことを選択したときに、私たちは百パーセント賛成しました。そして、あの子たちはそれから二年以上もかけて手続の申請を行い、日本人になりました。

あの子たちは、パスポートを持たないときの自分と、日本国籍のパスポートを持った自分との、外国へ出たときの処遇の違いということに身にしみて感じております。それは、皆さんには比較のしようがないことです。最初から日本人であり、日本の国籍で日本のパスポートを持っているから、日本のパスポートでなければどんなにつらい思いをするかということが分からない。

しかし、つらい経験をしているから私たちに分かるのです。だから、私はあえて言いますが、日本国のパスポートは水戸黄門の印籠のような、そういう効用を持っています。「これが目に入らぬか」とパスポートを出して、どこでもスツスツと通り過ぎていくことができます。

私の娘は、慶應大学の四年生になって、卒業旅行をしたいと思えました。みんなと同じように、すべての日本人の学友と同じように、卒業旅行をしたいと思えました。だけど彼女にはパスポートがありません。だから、私は彼女に、まず法務省に行つて日本の再入国許可をもらつてくるように言いました。つまり、「この人は日本に永住している人間だから、日本が受け

入れますよ」という紙が再入国許可なのです。それが彼女の唯一の身分証なのです。それを持って、各国の大使館へ行ってビザを申請することになります。

皆さんは、今日、「ああ、明日イギリスに行きたいな、パリに行きたいな」と思ったら、飛行機の予約さえすれば、次の日にも飛べるのですよ。しかし我々は違うのです。すべての大使館、すべての領事館に行つて、ビザを申請しなくてははいけません。ひどいときになると申請に三カ月もかかるのです。

だから、私は娘に「早くやりなさい、時間がかかるから」と言いました。

しかし、ギリシャ大使館はとってもいい加減でした。「ああ、大丈夫。再入国があれば入れるよ。ビザは要らない」と言っておきながら、結局、ギリシャのアテネに着いたとき、入管で入れないと言われました。

フランス大使館は、友人がいたので、何度も早くしてくれと頼んだのですが、結果的に、出発の前日にビザがありました。ビザがおりなくて、その時点で既に出発を一週間延ばしていました。三カ月前から申請してフランスもイタリヤもビザがおりません。

フランス大使館は出発の前日に「ビザがおりた」と通知が来たので、「明日出発だから、明日ビザをください」と言ったら、「だめだ」と

言ってきました。「一日おいてその次の日だ」と言います。もう仕方がないから、またフランス大使館に勤めている友達に頼んで、当日午後飛行機で出発するために、午前中、空港に行く姿で大きな荷物を持ったまま、フランス大使館の領事部に行つて無理やりビザをもらいました。

フランス大使館の窓口では、「本当は明日なのだけれども、何か知り合いがいるみたいだね」とさんざん嫌味を言われました。大使館に勤めている日本人というのは、ときどきこのような虎の威を借る狐みたいなことをやります。この子は三カ月前からビザを申請して、本当に今日出発するのだから、それぐらい良いのではないのでしょうか。彼女は嫌味を言われながら、空港に出かける身支度のまま大きな荷物を抱えて、ビザをもらい、そして出発しました。

また、せっかく一週間延期して待ったにもかかわらず、イタリヤ大使館からは出発までにビザはおりませんでした。彼らは仕事が全く遅くどうにもなりません。出した書類が本国まで旅行して歩いているわけです。つまり、パスポートを持っていない人間の書類はイタリヤ本国まで行つてから、本国の外務省の許可をとつて、それから戻ってくる。しかも、イタリヤ人の仕事の効率が悪いことといったら本当にどうしようもないのです。

しかも、イタリヤにおける旅行先のすべてのホテルの予約をしたという証明書を見せなければいけません。予約には予約の料金がかかるのですよ。結局、出発のときまでに間に合わず、出発して一週間たつてから、許可がおりたと大使館から電話が来ました。もう本人は出発して、どうにもなりません。だから同行者がイタリヤに行くのに、彼女はイタリヤに行けません。卒業旅行に彼女は何かでも行きたかったイタリヤに結局行けませんでした。

慶應の三田校舎のすぐ隣にイタリヤ大使館があります。彼女は何回も大使館に足を運んで、嫌な思いをして帰つてきて、とうとう最後に彼女は泣きながらキャンパスに戻ったことがあります。

友人はみんな、びっくりしました。娘の名前は麻那と言いますが、「ふだん陽気で明るくて、本当に能天気な麻那ちゃんが何で泣いているの」と非常に驚きました。娘は帰つてきて、私に言うのです。「ママ、麻那ちゃん、イタリヤに行けるよね。麻那ちゃん、いい子どもね」と、大学四年生の子が言った言葉です。

皆さんは彼女よりルールを守るといってもなくて、彼女よりイタリヤに行きたいという熱意があるわけでもないと思います。それでも、皆さんは行きたいと思えば明日にも行けるのです。それはあなた方が彼女よりすぐれて

いるからでも、経済的に恵まれているからでも、彼女よりもイタリアのことをよく知っているからでもないのです。

それは単に、あなた方が日本人であるという、この一点にかかっているのです。それを皆さんは考えたことがありますか。自分が日本人として生まれて、日本人であるということがどれだけ幸せなことであるかということを考えてみたことがあるでしょうか。

もちろん、ほかの国のパスポートでも、日本のパスポートと同じぐらいにファイブスターとして世界中に認められているパスポートはあります。けれども、そういう国は少ないのです。そして、日本がその国の一つであるということだけは絶対に間違いない事実です。皆さん、自分が日本人として生まれただけで、どれだけ恵まれた状況にあるか、ということを考えてみたことがありますか。多分ないでしょう。でも、なくて当たり前です。空気や水のありがたさについて考えてみたことがないのと同じです。

今、これだけコミュニケーションがどこにも成り立つような、そういう科学の発展、文明の発展、例えば、毎日冷暖房が自由に使えて、電話がすぐにかかけられて、電気がともし、ひねればガスがでて、水道が必ず水が出てというような状況と同じように、皆さんは自分が日本人

であるということの中に暮らしているのです。

だから、もし自分が日本人ではなく、日本のパスポートを持たないとしたら、一体どういう状態になってしまうのかということは、恐らく想像したこともないでしょう。そもそも想像もできないと思います。これは仕方がないことです。恵まれた人間が、自分がどれだけ恵まれているかということ自身にしてみても感じるということは何もないにありません。

私の場合は、幸か不幸か、子供たちもそういう比較をせざるを得ないという人生を送ってきました。娘は日本の国籍をとった後、リターンマッチだと、さつさとイタリア旅行に行ってきました。あつという間に、ビザを申請する必要もなく、実にさつそうと、気軽に、気楽に行きました。

私の息子は商社マンをやっております。もし彼に日本のパスポートがなければ、仕事は成り立たなかったと思います。年がら年中出張して歩いております。ときには一日に二回も三回も国境を変えて飛行機に乗るようなハードスケジュールをこなしております。もし、これがいちいち三カ月もかけてビザを申請しなくてはならなかったら、恐らく彼は働けなかったでしょう。自分の仕事が出来なかったでしょう。そういう意味でも、彼が日本の国籍をとったということは非常に良かったと、私も思っております。

ます。

今日こういう話をするのは、皆さんが、これから社会に出て、何らかの形で社会の役に立つ人間になってほしいと思うからです。

かつて私は和敬塾に入るのにはエリートだと思っていました。選ばれた人間だと思っていました。今はどうであるか、私にはわかりません。しかし、これだけ真剣に話を聞いてくださっているのを見ると、多分、その要素はまだかなり残っているのだと思います。けれども、一般の日本人はどうかというと、残念ながら私は心配せざるを得ません。

つまり、国際的なアンケート調査を見るたびに、どの国よりも、日本の若者が、日本に希望を持ち日本がよくなると思っている人が一番少ないからです。日本にはもう夢も希望もないと思っている若者が多いから、私は心配せざるを得ません。

さらに、日本の若者の夢は非常に小さく、非常に世俗的なところに留まっているように見えます。これはあくまでもアンケート調査の結果で、あなた方のことを言っているわけではありません。でも、これが一般的な若者の傾向だとしたら、とても危惧すべきことです。

なぜ私が今までさんさん、日本人に生まれただけでとても幸せだということ強調したかという、皆さんが既にほかの国の青年よりは

はるかにすばらしいハンディを与えられていることを分かってほしかったからです。

つまり、ほかの国の青年よりも五〇メートルも先を、今走っているのです。五〇メートル先を走っているからゆっくりで走ればいいと思っている人も当然いるでしょう。ウサギとカメのように、まあ、五〇メートルも先を走っているから少々昼寝していこうかと思う人も当然出てくるでしょう。でも、もう既に五〇メートル先を与えられたのだから、もう少し自分は責任を持ってこのレースを完走して、トップでゴールしようと思つてほしいから、私は今までの話をしてきたわけです。

皆さんがそう思つてくれるかどうかはわかりません。しかし、私はこれから日本を担う若者に話をしたいたいと思つております。ですからそういう会合から来る話は、私は優先的に出かけることにしております。私は日本に大変お世話になりました。もし唯一日本に恩返しができるとしたら、それはやはり日本の若者に、「日本には夢と希望がある、日本はすばらしい国なのだ」ということを語り伝えること、しかも外国人である私が語るといふことだと思つています。

そのほかに、私は日本を理解し、日本を愛する外国人を増やす努力をしております。それは日本語学校で外国人に日本語を教えるという

仕事を通じて行なつていきます。日本語を勉強することによって日本を理解する、日本に来ることによって日本を好きになるといふ、そういう外国の若者を育てる努力を、私はここ二十、四年間、ずっとしてきております。そして、幸いにいろいろなところで話をする機会を与えられましたので、そのたびごとに、日本がいかにすばらしい国であり、日本人に生まれたことがいかに幸せであり、そしてその基盤に立つて皆さんが何をすべきかということをお話しております。

それから、私は早稲田大学の卒業生です。私は早稲田にお礼奉公するために、二十数年、非常勤講師をやりました。安い給料ではありませんが、一生懸命やりました。先ほど言いましたように、学生に一切私語を許さないという真剣勝負をやつてまいりました。それはなぜなのか。後輩のためによかれと思つたことをやりたいと思つたからです。

間違いなく、私は早稲田大学にお世話になりました。合計して十年間、学部生として四年、修士で三年、ドクターで三年過ごしましたし、最後には大隈奨学金もいただきました。私は早稲田にお礼奉公するつもりで、倍返しに二十数年間、非常勤講師をやりました。あまりにも休講しないものですから、「先生みたいに休講しない人も珍しい」と優等生に言われたぐらいで

した。それぐらいまじめにやりましたが、でもそれは私にとつてもうれいしい仕事であります。今の私の日本語学校の二代目の校長は、私の教え子です。専任の教員もほとんどが私の教え子です。やはり私は、しっかりと、この二十数年の足跡というものを個人的にも目に見える形で残してきたと思つております。

皆さんは選ばれたものとして日本の社会に何ができるのか。少なくとも自分が選ばれたものだという自覚を持つて、何をしたいのか、何ができるのかということをも、もしまだ考えていなければ、これから考えてほしい。

日本では卒業式といひますね。学業を終えるという意味です。終わったことに対してひとつ区切りをつけるという意味です。アメリカでは卒業式のことを Commencement と言います。もちろん、Graduation Ceremony という言葉もありますけれども、大体が Commencement と言います。Commencement というのは、Commence——始めるということなのです。これからが人生の本当の始まりであるという意味です。仕事の始まりであり、社会に出て、これからはあなた方の足で立つて出ていくように、自分の翼で世界に飛び立っていきけるようにという、始まりなのです。

学生というのは、ある種のモラトリアム、つまり保護された状態です。卒業して社会に出て

いくということ、ある意味では、人生の本当の意味であなただけの個人の見せなければならぬという始まりなのです。しかしそのためには、今までどう生きてきたかということが問題になります。

卒業する人にはもう遅いかもしれませんが、在塾生の皆さんは、この何年間か、あなた方がどう生きるか、どう学業に取り組むか、どう自分の人生を組み立てていくかによって、その始まりに違いが出てくるということを考えてみてください。

私は早稲田大学に入学したばかりの一年生にいつも言ってきました。皆さんがここにいるのは皆さんの力だと思いかもしれない。でもその結果、不合格になって押し出された人もいます。だから、この四年間、この時間とこの早稲田という空間を大切にしてください。もし大切にしなければ、あなたによって押し出された人に対して申し訳ないですよ。この四年間をどう生きるかによってあなたの今後の人生が決まるのですよ、と仰うのですけれども、まあ、あまり役には立たないようですね。本当に一クラスで一人か二人が真剣に考えて、私の言葉を本当にかみしめた人がいるかもしれません。

でもまあ私としては、何かあったときに自分が用意万端できているのかどうか、つまり ready であるかどうかということだけでも大変

に違ってくる、と自分の人生で身にしみて感じております。チャンスが回ってきたとき、バットを打てるかどうか、あなたはせめてヒッポを打てるかどうか、それは次に使ってもらえるかどうかの問題なのです。それをあなた方は真剣に今まで考えてきたでしょうか。

和敬塾のパンフレットを読んでもみると、大学というのは知識を授ける場所、つまり知育をするところである。だから、ここでは徳育をやるのだと書かれています。残念ながら、今の大学は知育さえろくにできていないような気がします。ですから、皆さんは自分の力で、自分の内なる欲求で、知的向上をしなければならぬという時代なのです。流されていたら何もできないのが今の時代です。なにをやっても食べていけないし、「ほどほどいいのではなか」と思っているならば、それはそれでいいでしょう、その人の人生ですから。

しかし、もし自分が選ばれた人間としてこの世の中と係わりあつていきたいと思うのであれば、自らの体内のエンジンをフル活動にして知的好奇心を保ち続け、人生いかに生かすべきかということを考えて、そして、日々は研鑽に努めなければならぬのです。

もちろんこれは非常に誇張した言い方です。日々研鑽なんてできるわけはありません。しかし、少なくともそういうベクトルがあるのかど

うか、その姿勢があるかどうかで人生は変わります。

私は、ワイドショーに出演した際に、よくダイアナ妃やクリントンの話をしました。たくさんの方が「彼らだって人間だから仕方がない」と言いますが、私は「違う」と言いました。選ばれたものが自分の責任をわきまえないということは非常に残念です。一人は、イギリスの皇太子妃として税金を常に使っています。それから、そのポストに在るだけで、無条件に、理屈なしに、敬意を表されています。たまたま美しく生まれたから、なおさらです。クリントンも、アメリカの大統領として世界中の人間から注目されている人間であり、ある意味では世界の平和にかかわる決断をする人間なのです。

その人たちが普通の人間と同じように生きていていいのでしょうか。絶対に「ノー」です。選ばれた人間は、自分が他人よりも権力と税金と高い地位を与えられるとしたら、それに見合うだけのストイックな生活をしなければいけないのです。権利も欲しい、税金も使いたい、みんなからちやほよもされたい、と思うのは人間だから当然かもしれません。

けども、普通の人間と同じように、遊びもしたい、浮気もしたい、情事にもふけりたいというところは許されません。そのことが分からなくなってしまうからこそ、今の世界は混乱

しているのです。もし自分が選ばれた人間として、些かでもこの社会に貢献したいと思うなら、それに見合うだけの努力をしなくてははいけません。

例えば私は、本日、新聞の切り抜きを持ってきました。後ろの方には見えないかもしれませんが、これはカナダで七月二日に発行された『THE GLOBE AND MAIL』という新聞です。七月一日はカナダの祝日、National Dayです。ここで、まずこの一面の写真を見てください。この中年の女性はカナダの国旗と自分が所属しているケベック州の旗を同時に口にくわえて、一生懸命拍手をしております。そして、このタイトルは「Very proud to be Canadian」。あなた方は、生まれてこのかた、「Very proud to be Japanese」と言ったことがありませんか。

この言葉は、スリランカから十数年前に移民したカナダ人が言った言葉だそうです。写真はこの中年の女性が、自分が所属するケベック州の旗とカナダの国旗を口にくわえて、一生懸命恐らくどれかの講演に拍手をしているのだと思います。

さらにもう一つ。私はアメリカに友人がたくさんいます。その中のある男性は台湾から留学生としてアメリカに行きましたが、彼は「アメリカのすごいところは、どの国から来ようと、ここにやってきた人間がアメリカ人になるう

と思ったその瞬間からアメリカ人であるというところだ」と言っております。私は去年その言葉を聞きまして、なるほどと思いました。皆さんもご存じのように、九月十一日（二〇〇一年）にニューヨークの同時中核テロが起こった後、アメリカ人の心は一つに結ばれました。九〇%以上の人がブッシュ大統領を支持したのです。それはこのことを表しているのです。もちろん、アメリカもカナダも移民国家です。

移民国家であるからこそ、すべての人が、自分のアイデンティティーとは何か、と真剣に考えるのです。そしてそれぞれの人間が真剣に考えた結果の選択であるからこそ、強いのです。だからこそ、本物のナショナリズム、愛国心というのが生まれてくる。我々はアメリカ人だ、私はカナダ人である、という思いになるのですよね。

実はこの時、私のつれあいである東京理科大学の教授、周英明は、四十五年ぶりにアメリカのラスベガスで同窓会をやることが決まっております。これは同時テロが起こる前から決めていたことです。彼は台湾大学の電気科出身で、電気科の人たちの多くがアメリカに留学して、アメリカにたくさん友人がいるのです。そして、定年になった人もいますし、やっとみんな少々時間ができてきました。政治的にも少し楽になって、行動も自由になりました。そ

れでは四十五年振りに同窓会をやる。場所はどがいいか。観光もできるし、みんなが集まりやすいから、十月の初旬にラスベガスで同窓会を開こうと、今年（二〇〇一年）の七月ぐらゐから決まっておりました。

ところが、さあ、大変。テロが起こりました。どうなることか、と思いました。子供たちは、父親が心配だから「パパは、旅行は不慣れだし、今回はママも一緒に行けないわけだから、この際、やめたら」と言いました。父親は「象牙の塔」の人間で、ヨーロッパに二回行きましかれども、全部私がツアーガイドを務めました。私はパスポートのない時代から、何とか奔走して、再入国許可証を認めてくれるところも認めてくれないところも、もう本当に、無理やりいろいろなところを出歩きました。再入国許可書を認めてくれるところも、さっき紹介したように、二カ月も三カ月もかけてビザを待つて出かけたのです。しかし、そういうのが嫌だ、と私のつれあいはどこにも行きませんでした。四十年間、どこにも一歩も出ないでひたすら日本にいたのです。ですから彼は外国に出かけるということは全く不慣れなのです。

それでも、息子が派遣されておりましたので、やっとスペインへ一度訪ねました。イタリアで学会があった時も、私がツアーガイドをやったのです。今回は一人で、行ったこともないアメ

リカに行くというので、子供たちは大反対したのです。

そこへ幹事役の人からEメールが入りました。「この際、同窓会をどうするかということを含んで相談した。しかし、やはりやろうとすることに決まった。つまり、自分たちはテロの前に決めたことをやることによって、国との連帯を示すことができる。空港ではいつもより厳しい検査があるだろうから、前より安全だろう。自分たちが平常のことを続けることによって、犠牲になった方々に祈りを捧げ、そしてこのために一生懸命頑張っているリーダーたちに連帯を示すことになる」という内容の大変感動的なEメールが入りました。

その感動的なEメールを読まない前から、私とつれあいは相談して、行くべきだという結論を出しました。また読んでからも、その意を強くしました。私たちはテロ撲滅に対して何ら力を出せない。アメリカがテロと闘うことを、私たちは何も具体的に支援することはできない。しかし、せめてテロの前に決めたアメリカに行くということ、テロの後も実行することによって、ささやかなモラルサポートを示すことができる。だから行くべきではないか、と私は言いましたし、つれあいは「僕もそう思う」と言って、十月の初旬にラスベガスに行き、みんなでナショナルパークを見て歩いたりして、十日

間の旅を無事終えて戻ってきました。

三十七人集まる予定でしたが、重病で参加できなかった人以外で、この際だからやめると言って不参加だったのはたった一人でした。

それに比べると、フランクフルトで行われたブックフェアでは、日本の参加者の三分の一がキャンセルしたそうです。開設するブースは前もって決まっているわけですから、日本が集まるところのブースというのは、みんな閉鎖されていて異様な雰囲気だったようです。しかも参加しなかったのは、全部が大手の出版社だということ。これは朝日新聞に載りましたから、読んだ人もいるかもしれません。当事者は、安全第一を考えたと弁明したそうです。

それはそのとおりです。だれもが安全第一を考えなくてはいけません。だれも大切な大切な自分の命、または家族の命、友人の命、同胞の命を粗末になんかできるわけがない。大切な命は当然です。けれども、安全を乱すのはだれなのかということなのです。安全を乱すのは、秩序をわきまえないテロリストなのです。人間社会では共通の秩序というのがあのです。最初に私が申し上げました、教室の秩序、講演の秩序、学校の秩序、家庭の秩序、社会の秩序、国の秩序、そして、ひいては世界的な秩序があります。

もちろん、国によって主義主張が変わります。

宗教によっても信じる神は違います。地域によっても価値観は違います。でも人間として守らなければならない秩序というものは、厳然としてそこにあるのです。その秩序を乱す人間、それは平和を乱す人間であり、安全を乱す人間です。そういう人間に対して屈服すること、そういう人間を怖いからということ、対立を避けて生きるといことは、ますます自分の安全を危機におとしめることになるのです。それがわかっていない人間が、安全第一というように、目の前の安易な考え、安易な決断、安易な行動をとるのだと、私は思っております。

私には大好きな映画があります。ずっと忘れられない映画、もう二十年ぐらい前ででしょうか。多分ビデオでも借りられると思いますから、心ある人はぜひ借りて見てください。それはイギリス映画で『炎のランナー』という映画です。知っている人は手を挙げてください。ほんの数人です。それも年輩の方のほうが多いようです。昔の映画ですが、若い人はぜひ見てほしい。これは一九二四年のパリのオリンピック大会に向けての、陸上競技に参加する三人のイギリスの若者の話です。これは回想という形で映画が始まります。この回想をしている人は上流社会出身の貴族で、この人が一番長生きをして、その自分の仲間を思い、たたえろという形でその映画が始まります。

この三人の若者が、かつて陸上王国であったイギリスの選手として一九二四年のパリ大会に参加するために合宿をしています。この若者は貴族階級の出身ですから、母親が、当然この合宿に多額の寄附をしているのです。母親にお礼の手紙を書くという形で、しばしばナレーシヨンが入ります。

三人の若者にスポットが当てられるのですけれども、一人は、ナレーターを務めながら狂言回しのような役割のこの貴族の青年（アンデイ）。あとの二人はというと、一人はケンブリッジ大学の学生であるのですけれども、ユダヤ系の出身（ハロルド）です。

彼は当時のイギリス社会の中で、自分がユダヤ系であるということにより差別を受けているという実感から来る、非常に反抗的な、怒りを持った青年です。ですから、この青年はパリ大会で金メダルを取ることによって、自分の民族の証、自分のアイデンティティーを確立したいと思っていました。

彼はユダヤ人らしく、方法を問わずに金メダルを取る努力をします。その当時、アマチュアリズムの権化であるようなオリンピックで、お金を払ってコーチを雇うことはできないのですが、彼はお金を払ってコーチを雇うのです。だから、それで彼は百メートルの金メダルを取ること成功するわけです。要するに、彼はユ

ダヤ人という出自、自分のアイデンティティー、イギリス社会においてイギリス国籍であってもユダヤ人であるということによって持たされた苦悩や怒りというものを、百メートルで金メダルを取るということで爆発させました。

最後の一人は牧師の卵（エリック）です。彼は神に捧げるために走るのです。彼は天才的なランナーです。ところが、パリ大会で百メートルの予選がたまたま安息日にあたるということで、予選に出ないと言ひ出します。さあ、大変です、メダル候補ですからね。

ところが、この貴族青年は、ここで自分の恵まれた人間としての責任、つまり貴族として育まれた責任——noblesse oblige を完全に果たすわけです。「僕はもう既にハードルでメダルを取った。だから、僕が出る四百メートルを彼に譲ろう。彼のほうがはるかにメダルを取る可能性がある。僕はもう既に一つメダルを取っていますから、彼に譲ります」。

四百メートルの予選日がたまたま安息日ではなかったたので、その選手は出場し、決勝に出ます。そして、つまずいたりしましたが、それでも見事金メダルを取ります。イギリスに、百メートル競技も金メダル、四百メートル競技でも金メダルをもたらすという結果でした。

それは、やはりこの貴族青年が、広い視野で、自分が何をやるべきか、この場においてイギリ

スのために何がいいかということを決断して、自分が走ることよりも、もつと早く走れるだろうという人に譲るといふことから生まれた結果なのです。

しかし、この貴族の青年はそれだけではないのです。私が皆さんにお話したのはこれからのことです。つまり、恵まれた立場のものが何をすべきかということなのです。食べるに困らない、困らないどころか、寄附をするだけのお金もふんだんにある。そして自分はイギリスの皇太子とも、tête-à-tête——ごく近しく話ができるような身分であり、ケンブリッジの学生でもある。すべてに恵まれているこの学生は、では自分が何をすべきかということを考えると、別に何もすることははないか、努力しなかつたって、貴族になって広大な屋敷を継承し、何をしなくても立派に生きていかれるだろう。

そこで彼は何をしたか。お客さんを送り出した後、彼は練習を始めるわけです。自分の広大な屋敷の庭でハードルの練習をはじめます。ハードルがずっと並べられている。彼は、お客さんとしやべっているときは本当に気楽に優雅にお客さんをもてなし、お客さんが帰ったら、さっと表情が変わる。バトラーが準備したハードルの両端にシャンパングラスがずらりと並んでいる。そのシャンパングラスにシャンパンを注ぐのです。彼はさっとスポーツをする服

装になって、ハードルの両端に置かれたシャンパングラスのシャンパンをこぼさないように、落とさないように、ハードルをいかに美しく飛び越せるかという練習をします。

タイムだけの問題ではない。メダルを取るだけの問題でもない。彼が心がけているのは、いかに美しく跳躍するかということでした。ただめったやたらに走るのではなく、いかに美しくこのハードルを飛び越えるか。

天才的なランナーもいる。民族のため、自分の出目のために走る人間もいる。神に捧げるために走る人間もいる。さまざま人間がいる。自分はイギリス貴族として、上流社会に生まれた。だから自分は別に出自のために何かを証明する必要もない。しかしそこで自分が課された仕事、自分がやるべきことは何なのか。それは、美しく走ること。美しく跳躍することではないか。

恵まれた人間に課せられた課題、または恵まれた人間にしかできない課題。これを彼はしっかりとわきまえて行動しました。私は三人の主人公がそれぞれ好きですけれども、一番好きなのはこの人です。自分が何をすべきかをしつかりわきまえて、美しく走り、跳躍する。それは美しく生きるといふことなのです。

皆さんに、ぜひ、この言葉をしっかりと受け止めていただいて、今後、日本の社会、日本と

いう国に皆さんが何ができるかということをしつかり考えていただきたいと思います。

これから社会に出る皆さんに、心から期待して、はなむけの言葉として贈ります。

ご清聴、ありがとうございます。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。